The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国刊行朝鮮語文法書書目
Author(s)	植田, 晃次
Citation	大阪大学言語文化学. 2016, 25, p. 95-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国刊行朝鮮語文法書書目*

植田　晃次**

キーワード：朝鮮語文法書、朝鮮語学、中国

중국에서의 한국어 문법 연구는 북한 문법을 수용한 시대, 반우파투쟁～문화대혁명 기간의 폐쇄된 환경 속에서 국한된 자료를 바탕으로 독자적으로 발달한 시대, 한중수교로 남한에서의 성과가 수용된 시대를 거쳐 진행되어 왔다. 그러나 그 성과는 남북한, 일본 등 중국 국외에서는 충분한 관심이 기울어지지 않았을 뿐 아니라 그 성과 자체가 잘 알려지지 않고 있다.

본고는 중국에서 간행된 한국어 문법서에 대하여 간단히 개관하고 그 목록을 제시함으로써 상술한 공백을 메우려고 시도하는 것이다.

1 はじめに

中国では南北朝鮮・日本等と並び、朝鮮語学研究の分野において、活発な活動が行われている。従来の朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）との関係や近年の大韓民国（以下、韓国）[1] との盛んな交流のほか、国内に少数民族としての朝鮮族を擁していることもその一因である。

しかし、その研究成果は国外に十分に知られているとは言い難く、それなりの蓄積があるにも拘らず、一部を除いてその存在自体が知られていないのではないかと思われる。例えば、日本で発表される朝鮮語学研究の論文において、参考文献としてこれらが挙げられることは、『朝鮮語実用語法』＜３＞[2] 等ごく一部を除きほとんどない。また、日本国内でこれらを体系的に所蔵する機関もほぼ存在しない。この状況は南北朝鮮でも大差がないようである[3]。これには、その成果が参照し得るものではないという客観的事実以外に、上述のように、その存在自体に関心が払われず、その存在自体が空白となり、知

---

* 中國 刊行 韓國語 文法書 書目（우에다 고오지 UEDA Kozi）
** 大阪大学言語文化研究科

---

[1] 朝鮮に関わる呼称については植田（2002）による。ただし、朝鮮語・漢語を日本語に訳す際は、元の言語に容易に戻せるように漢字の置き換えにより示す。また、文献名等の朝鮮語は日本語訳（直訳）で、漢語は漢字の置き換えで示した。この原則により、「語音論」・「詞典」等の日本語として一般的ではない訳も用いている。
[2] ＜＞内は表１でのNαである。
[3] 韓国で 2015 年に 12 冊の文法書が影印出版されたが、4 で述べる問題点がある。

られていないということもあると考えられる。

一方、中国での朝鮮語学研究についての先行研究で言及される情報には、5で一例を挙げるように、記述の誤りと思われる箇所や漢語書名を朝鮮文字（＝ハングル）で表記したため原物の朝鮮語書名と齟齬をきたしていたり、本文の記述言語が判然としない場合が見受けられる。

2 目的・意義

本稿では、中華人民共和国建国以降の中国での朝鮮語研究史の流れを念頭に置きつつ、公刊された初の朝鮮語文法書である『朝鮮語文法（形態論）』＜1＞（1972年）以降の文法書44件の原物に基づく書誌情報の一覧を、先行研究（崔允甲1992、許東振1995等）で示された以降のものも含めて提示する。これによって、1で述べた空白を埋め、朝鮮語学研究に資す基礎データ構築の一助を提供することを目的とする。

本稿で対象とする中国刊行朝鮮語文法書、とりわけ、1980年代前半の成果、例えば『朝鮮語実用文法』＜6＞等は、絶え間ない漢語からの影響という社会言語学的要因の波をも受けつつ、閉鎖された環境で限られた資料から知恵を絞って考え出されたものという点で評価できる。また、『朝鮮語文法』＜5＞が「他人［植田註：共和国の文法研究］に無条件に追従せず伝統文法から抜け出そうという努力においてきわめて大きな寄与をした」（崔允甲1992:126）と位置付けられていることも、当時の研究成果のもつ同様の性格を示している。加えて、『朝鮮語実用語法』＜3＞や『朝鮮語基礎語法』＜18＞といった、漢族（漢語母語話者）による成果には、漢語という補助線を引くことによって朝鮮語母語話者による成果とは異なる対照言語学的観点が見出せよう[4]。さらに、朝鮮族にせよ漢族にせよ、南北朝鮮双方への留学経験を持ち、両者の学術動向や社会を知る研究者は中国以外では極めて少ない[5]。そして、平壌への長期留学を含めた従来行われてきた共和国との交流の深さや朝鮮半島北部の方言をベースとする中国、とりわけ延辺で行われる朝鮮語という基礎によって、ソウル標準語では用いられず、平壌文化語ではしばしば用いられる文法項目の記述が見られたりする。たとえば、『朝鮮語実用語法』＜3＞では補助語幹 - 겠 - について取り上げているし（260頁）、『朝鮮語基礎語法』＜18＞では - 겠 - のほかに、終結語尾 - 기요（234・347頁）を取り上げている。

このような性格を持つ中国刊行朝鮮語文法書の一覧を示すことは、韓国での研究成果

---

[4] ただし、『朝鮮語実用語法』の共編者のうち、許東振は朝鮮族である。

[5] 例えば、全炳善（広東白雲学院）は金日成綜合大学への「公派留学生」としての留学経験と、韓国への「公派高級訪問学者」としての留学経験をもつ（全炳善2014: 著者略歴）。なお、2014年度の中国から共和国への「公派留学生」は60名である（中華人民共和国駐朝鮮民主主義人民共和国大使館ウェブサイト＞中朝関係＞教育交流「2014年度国家公派留学生抵到朝」2014年4月21日付、2015年9月24日最終接続、http://kp.china-embassy.org/chn/zcgx/jyjll/t1148736.htm）。

のみを参照する傾向が強い、とりわけ日本における朝鮮語文法研究の諸分野において、南北朝鮮での研究を統合する、あるいはその枠組みを超えた、異なる視点を提示するという点で意義がある。

3 対象とその選択基準

ここではまず、中国における朝鮮語研究史・朝鮮語文法研究の状況について念頭に置いた上で、本稿の対象について述べる。

社会主義国家を標榜する中国では学術研究や外国語教育政策も政治的状況に左右されてきた。このような観点から、例えば許東振（1995:481）は中国朝鮮語研究史の時期区分を 1945 年～ 1956 年、1957 年～ 1976 年、1977 年～現在（1995 年）のように行っている。この区分は、第 2 次世界大戦の終結、反右派闘争の開始、文化大革命の終結という政治的な出来事を転換点として、政治史的区分に単純に従ったものである。

中国における朝鮮語文法研究について見れば、政治的状況がすぐさま研究に反映されるというわけではないことや、政策に濃淡があったりすることから、上のような機械的な時期区分と若干のタイムラグを持ちながら、崔允甲（1992:118-127）・崔義秀（2015:175・190-193）で指摘されているように、(1) 朝鮮民主主義人民共和国の文法を受容した時期、(2) 反右派闘争・民族整風運動から文化大革命に至る期間の閉鎖された環境で限られた資料に基づいて独自に発展した時期、(3) 韓中の外交関係樹立により大韓民国での成果が受容された時期を経て行われてきた。

本稿では対象の選択を以下の方針で行った。

大きな原則として、民族を問わず中国人を主たる編著者として中国で公刊された、文法体系を全体的に記述した研究書を「文法書」と見做す。ただし、いわゆる吐や漢語でいう慣用句型や慣用組合[6]等を分析した便覧類は採る。なお、ここでいう公刊とは、統一書号（現在では ISBN）が付与されたものを指す。これは正式の出版物であることを示すものである。

この大原則の下に、以下のものは除く。

(1) 朝鮮語文法書の一部（編者不記載（1979）『朝鮮文化語文法』科学・百科事典出版社など）では語音論も対象に含めることがあるが、語音論を単冊で対象としたものは、複数冊から成る連作の一部であっても本稿では対象としない。例[7]：全学錫（1986）『朝

[6] 便宜上、「토」を「吐」とする。崔允甲・李世龍（1984:132）では、「토」を「単語の語幹に付き文法的意味を表す形態部。」としている。また、「慣用句型」や「慣用組合」とは、日本語では「分析的な形」（菅野裕臣 他『コスモス朝和辞典』白水社、1018 頁）等とも呼ばれる、「補助的な単語を含む 2 単語以上からなる文法的な形」でアスペクトやモダリティ等を表すものを多く含む。

[7] 例が複数の場合は刊行年順に示す。

鮮語の民族的特性（1)』黒龍江朝鮮民族出版社＊[8]

(2)広範な一般学習者向けのハンドブック類は除く。例：陳艶平・高在真・張新傑(2010)『韓国語常用相似語法辨析』世界図書出版公司※、林従鋼・金三坤等（2013）『韓国語語法解惑与詞義辨析』北京大学出版社※

(3) 大学や放送講座などの（第2）外国語（少数民族語）教育用のテキスト類は原則として除く。例：李得春・金祥元（1982-1983）『速成朝鮮語自学読本（全三冊)』延辺人民出版社※、何鎮華等（1990-1993）『朝鮮語基礎教程（全三冊)』延辺人民出版社※、李得春（1992）『初級朝鮮語』東北朝鮮民族教育出版社※、金東国・盧正愛（2013）『韓国語語法教程』民族出版社※。ただし、文法を記述しており、かつ稀覯書と見做せる『朝鮮語自学読本 第三冊 語法』＜4＞は例外として採る。

(4) 特定のトピックスを扱ったものは除く。例：崔允甲（2009）『韓国語文法新講』黒龍江朝鮮民族出版社＊

(5) 論文集は除く。例：宣徳五（2004）『朝鮮語文論集』開明出版社※、金祥元（2005）『現代朝鮮語研究』延辺大学出版社＊、延辺大学言語研究所・延辺言語研究所（2008）『朝鮮言語学研究』延辺大学出版社＊、金光洙（2012）『朝鮮語考察と研究』延辺人民出版社＊

(6) 従来の朝鮮語文法の紹介を主とするものは、文法の体系的記述を意図したものではないため除く。例：李貴培（1989）『朝鮮語文法理論』延辺人民出版社＊、車光一（1994）『歴代朝鮮文法論』民族出版社＊

(7) 朝鮮語学全般を広く扱う概説書はその一部として文法について簡明に記述したものであるため除く。例：車光一（2002）『朝鮮語学原論』民族出版社＊、林従鋼・任暁麗（2005）『韓国語概論』北京大学出版社※、全炳善（2007）『韓国語概論』民族出版社＊

4 方法論

韓国では、大衆文化コンテンツにおいて、模倣・模作・翻案や無断複製という形によって、知的所有権を侵害する海賊版が広く流通してきた（尹性喆 2011)。このような侵害は大衆文化コンテンツに限ったものではない。近年状況の改善が見られるものの、韓国の学界や日本の朝鮮学研究の世界においても、海賊版を用いて知的所有権を侵害するという問題が見られてきたことは、佐藤（2012）で取り上げらたような事例からもわかる。まっとうな研究において、海賊版を用いることは研究倫理の点から不適切であることは言うまでもない。しかしながら、現在でも依然として知的所有権に対する認識が韓国や

[8] 文末の引用文献を含め、表1にない書籍には、記述言語を＊（朝鮮語)、※（漢語）で付す。無印のものは日本語文献である。

日本の出版界や学術研究において共有されているとは必ずしも言えない。

このような知的所有権の不尊重という問題に加え、韓国で刊行される影印本には、杜撰な編集によって、2冊が合冊された影印本で一方の奥付が他方の奥付として影印される、原本の一部を意図的に消去して影印に付すなど[9]、意図的にせよ意図せずにせよ原本が改竄されている場合がある。

中国刊行の朝鮮語文法書の影印本についても、知的所有権に関する問題のほかにも資料としての正確さ・的確さの問題がある。2015年に「歴代韓国文法大系（Ⅱ）」の第2部第53冊～第64冊として12冊が影印されたが、(1) 対象の選択が恣意的である、(2)『朝鮮語文法』＜5＞のような比較的ありふれたもので、前書きを部分的に欠落したものを影印している、(3) 影印の際、表紙・奥付などを恣意的に削除しており、原本の状況が確認できない等の欠点がある[10]。

ところで、中国での朝鮮語学研究や朝鮮語文法書の刊行状況については、崔允甲（1992）、許東振（1995、2004）、全学錫（2008）、池東恩・金光洙・尹熙男・金潔（2012）、金光洙（2012）、崔羲秀（2015）などの論著や、延辺人民出版社総編辦公室（1983、1991）、任南洙[11]・池玉子（1992）、本社（発行年不記載）などの出版社の目録により概略や内容がわかる。しかし、記述の誤りと思われる箇所や漢語書名を朝鮮文字（＝ハングル）で表記したため原物の朝鮮語書名と齟齬をきたしていたり、本文の記述言語が判然としない場合が見受けられるなどの問題点が散見される。

本稿では、これらの論著や目録、また影印本を参照しつつも、その問題点に鑑み、対象とする文法書について、「資料に関して、影印本やデジタル化されたものを最終的な判断に用いることは極力避け、可能な限り原物を実見した資料に基づいて研究を行う方法」である「原物主義」（植田 2012:204）に基づいて、原物を確認した上で[12]作成した書目を提示するという方法論を用いる。

5 おわりに

中華人民共和国建国以降の中国での朝鮮語文法研究の状況を念頭に置いた上で、1972年に至って初めて朝鮮語文法書が公刊された点を踏まえつつ、影印本や目録を利用する問題点も考慮し、原物主義に基づき原物を確認した中国刊行の朝鮮語文法書の書目が表

[9] 前者の例としては「歴代韓国文法大系」第2部第10冊（博而精、2008年）で『韓語入門』の跋と正誤が『日韓善隣通語』に付されていること（矢野謙一熊本学園大学教授のご教示による）、後者の例としては、かつて韓国で平壌刊行の書籍が影印される際、しばしば金日成等の教示の引用部分を切り取って影印に付していたことが挙げられる。図書館のデジタル化資料でも原本の落丁なのか作業ミスによる欠落かの確認ができない等の場合がある。

[10] 12冊が正規手続きの影印本だとしても、版権取得等は明示していない（2015年12月7日現在）。

[11] 漢字表記は不明のため、南洙については音訳（同音の漢字で仮表記）した。

[12] このほとんどを所蔵する大阪大学附属図書館蔵書に主として基づいて確認した。

1である。なお、原物を確認し得ていないものも参考として典拠とともに挙げることも考えたが、誤った情報の拡散のおそれに鑑み省いた[13]。表1には遺漏もあろうかと思われる。それを補充するとともに、これらの個々の文法書について、また、これらの相互関係についての研究が今後の課題となる。さらに、これらに基づく研究は、知的所有権を尊重した上で朝鮮語文法研究の深化に資すであろう。

凡例

配列：刊行年月順に依る。

№：通し番号。本文中では＜＞で括って示す。

言語：本文の記述言語が朝鮮語か漢語かを略号（朝／漢）で示す。

出版社：商務印書館を除き、出版社名から出版社を略して示す。

発行年月：原則として初版第1刷を示す。日付以外は奥付での表示事項である。

なお、書名・著者名等の変更や「修訂」等を伴う継続関係を示す場合には、書名の下に＜№＞→、→＜№＞のように示す。№11に＜3＞→、→＜19＞→＜28＞とあれば、＜3＞→＜11＞→＜19＞→＜28＞のように何らかの変更を伴い刊行されたことを指す。

表1　原物主義に依る中国刊行朝鮮語文法書書目

№	書名 ＜＞内は前継書／後継書	言語	編著者	出版社	発行年月	ISBN/ 統一書号
1	朝鮮語文法（形態論）	朝	延辺大学朝鮮語系朝鮮語教研組・延辺教育出版社朝鮮語文組	延辺教育	1972.9	M7092・800
2	朝鮮語文法（文章論）	朝	延辺大学中文系朝鮮語教研組	延辺教育	1974.9	M7092・1299
3	朝鮮語実用語法 →＜11＞→＜19＞→＜28＞	漢	北京大学東語系朝鮮語専業・延辺大学朝語系朝鮮語専業	商務印書館	1978.9	9017・769
4	朝鮮語自学読本　第三冊　語法	漢	許東振	延辺人民	1980.7	9136・34

[13] 例えば、池東恩・金光洙・尹熙男・金潔（2012:296）の『朝鮮語文法論（形態論）』（延辺大学朝文学部朝鮮語講座・延辺人民出版社朝鮮語文組、延辺人民出版社、1972年）は＜1＞である可能性が高い。このような不確かなものを除けば、金鎮容（1986）『現代朝鮮語』延辺教育出版社と劉銀鍾（1978）『吐を使うのに現れるいくつかの問題』延辺人民出版社が原物を確認し得ていない文法書である。なお、許東振（1995:552）では『現代朝鮮語』の刊行所を延辺大学出版社としている。

5	朝鮮語文法	朝	崔允甲	遼寧人民	1980.9	M9090・3
6	朝鮮語実用文法	朝	徐永燮	遼寧人民	1981.2	M9090・6
7	朝鮮語吐対比文法 →＜42＞	朝	車光一	遼寧人民	1982.1	M9090・7
8	朝鮮語文法	朝	東北三省『朝鮮語文法』編纂小組	延辺人民	1983.10	M9136・40
9	朝鮮語吐分類	朝	車光一	民族	1984.8	M9049(6)11
10	朝鮮語簡志	漢	宣徳五・金祥元・趙習	民族	1985.12	9049・57
11	朝鮮語実用語法 ＜3＞→、→＜19＞ →＜28＞	漢	韋旭昇・許東振	商務印書館	1986.5 北京第2次印刷	9017・769
12	中学生朝鮮語実用文法	朝	延辺教育出版社朝鮮語文編集室	延辺教育	1986.6	MK7092/2366
13	朝鮮語の民族的特性(2)	朝	姜銀国	黒龍江朝鮮民族	1986.12	M9296・22
14	現代朝鮮語（文法論）	朝	姜銀国	延辺大学	1987.3	7563400028
15	中世朝鮮語文法	朝	崔允甲	延辺大学	1987.6	756340001X
16	朝鮮語吐知識	朝	崔羲秀・金京岩・白英愛・姜恩国[14]	黒龍江朝鮮民族	1987.8	7538900314
17	朝鮮語口頭語文法	朝	崔明植	遼寧民族	1988.11	7805270457
18	朝鮮語基礎語法 →＜29＞	漢	宣徳五	商務印書館	1994.1	7100016770
19	韓国語実用語法 ＜3＞→＜11＞→、 →＜28＞	漢	韋旭昇・許東振	外語教学与研究	1995.6	7560009204
20	韓国語慣用句型	漢	劉沛霖・劉鳳琴	東北朝鮮民族教育	1996.12	7543727250
21	朝鮮語文法	朝	崔明植・金光洙	延辺大学	2000.5	7563413731
22	韓国語文法[15]	朝	崔允甲	吉林人民・延辺教育	2000.11	7206036015
23	韓国語標準語法	漢	李得春	吉林人民・延辺教育	2002.5	7206036023
24	韓国語実用語法	漢	崔羲秀・兪春喜	延辺大学	2003.6	7563418113
25	現代韓国語語法	漢	許維翰	北京大学	2004.8	7301074956

[14] 姜銀国の誤植と思われる。
[15] 漢語書名は『朝鮮語文法』。ここでは「文法」も語法ではなく、文法としている。

26	韓国語基礎語法 →＜ 34 ＞	漢	崔羲秀	黒龍江朝鮮民族	2005.2	7538912436
27	簡明韓国語語法	漢	朴淑子・禹佳京	中国宇航	2006.6	7802181003
28	新編韓国語実用語法 ＜ 3 ＞ → ＜ 11 ＞ → ＜ 19 ＞→	漢	韋旭昇・許東振	外語教学与研究	2006.9	7560056741
29	韓国語基礎語法 ＜ 18 ＞→	漢	宣徳五	社会科学文献	2008.3	9787509700556
30	朝鮮語文法 →＜ 40 ＞	朝	金哲俊・金光洙	延辺大学	2008.7	9787563424368
31	韓国語実用語法詞典	漢	許東振・安国峰	外語教学与研究	2009.5	9787560085678
32	韓国語語法教程	漢	李得春	上海外語教育	2009.5	9787544609111
33	韓国語語法	漢	劉沛霖	商務印書館	2009.6	9787100058414
34	韓国語基礎語法（修訂本） ＜ 26 ＞→	漢	崔羲秀	黒龍江朝鮮民族	2009.8 第 2 版第 2 次印刷	9787538916249
35	新時代韓語系統語法	漢	『新時代韓語系統語法』編委会	北京	2009.12	9787200080353
36	標準韓国語語法	漢	任暁麗・張文麗・李泰俊	大連理工大学	2010.2	9787561154021
37	韓朝文法比較研究	朝	許東振	延辺大学	2010.7	9787563432226
38	韓国語語法句型大全	漢	金仁龍・宋昌洙	延辺大学	2010.7	9787563431373
39	韓国語慣用組合	漢	劉沛霖・劉鳳琴	商務印書館	2011.5	9787100072120
40	朝鮮語文法（修訂本） ＜ 30 ＞→	朝	金哲俊・金光洙	延辺大学	2011.7 第 2 次	9787563424368
41	現代朝鮮語	朝	金哲俊	延辺大学	2011.8	9787563443901
42	韓国語実用語法－助詞詞尾辨析 ＜ 7 ＞→（漢語訳）	漢	車光一 / 顧祖孟訳	上海訳文	2011.12	9787532754021
43	朝鮮語文法知識	朝	朱錫峰	遼寧民族	2012.11	9787549704255
44	われわれのことばの文法	朝	姜鎔沢	民族	2013.9	9787105129218

引用文献

・朝鮮名・漢名は便宜上、日本漢字音により配列する。

尹性喆（2011）「海賊版から見た韓国漫画史」『芸術工学会誌』56、芸術工学会

植田晃次（2002）「言語呼称の社会性」『社会言語学』2、「社会言語学」刊行会

植田晃次（2012）「明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究」『日本語言文化研究』第二輯（下）、延辺大学出版社

延辺人民出版社総編辦公室（1983）『図書目録 1947-1982』延辺人民出版社 ※（附朝鮮語）［編者は巻頭の「説明」（序に相当）、発行年月は標題紙に依った。］

延辺人民出版社総編辦公室（1991）『図書目録 1983-1990』延辺人民出版社 ※（附朝鮮語）［同上］

許東振（1995）「中国朝鮮語研究史」北京大学朝鮮文化研究所『言語史』民族出版社＊

許東振（2004）「中国での朝鮮語文法書編纂の変遷過程」延辺言語研究所『朝鮮語研究』4、黒龍江朝鮮民族出版社＊

金光洙（2012）『朝鮮語考察と研究』延辺人民出版社＊

崔允甲（1992）『中国での朝鮮語の発展と研究』延辺大学出版社＊

崔允甲・李世龍（1984）『朝鮮語学辞典』延辺人民出版社＊

崔羲秀（2015）「金壽卿と中国の朝鮮語学」板垣竜太・コヨンジン『北に渡った言語学者・金壽卿の再証明』同志社コリア研究センター

佐藤英雄（2012）「韓国の海賊版販売でけんか両成敗」『メディア展望』603、新聞通信調査会

全学錫（2008）「中国での朝鮮語（韓国語）研究動向」延辺大学言語研究所・延辺言語研究所『朝鮮言語学研究』延辺大学出版社＊

全炳善（2014）『韓国語助詞詞尾慣用語慣用型縮略形実用詞典』民族出版社 ※

池東恩・金光洙・尹熙男・金潔（2012）『中国での朝鮮語研究論著目録』、延辺大学出版社＊

任南洙・池玉子（1992）『中国朝鮮文図書総目録 1947-1991』延辺人民出版社＊

本社（発行年不記載）『図書目録 1986-1990』遼寧民族出版社 ※

（付記）査読者に感謝致します。

本稿は科研費（25370676）による成果の一部である。